

# 雪印育成・イタリアンライグラス早生品種の 特色と上手な利用法

雪印種苗(株) 千葉研究農場

作物研究室 室長

近藤 聡

## はじめに

イタリアンライグラスは府県の冬作の代表的草種で、トウモロコシの後作や水田裏作利用を中心に各地で広く利用されています。市販されている品種の数も多く、早晩性や利用期間など特性の幅も広いので、利用目的や地域性に合った品種の選択が可能になっています。現在、関東以西を中心として、早生クラスの品種が最も多く利用されていますが、ここでは、その中でも人気が高い弊社育成の早生品種、タチワセとタチマサリの特性とその上手な利用方法についてご紹介したいと思います。

## 1 タチワセの特性

作付けの多い早生品種の中で、最も人気の高いベストセラー品種です。

収穫適期となる出穂期は九州など西南暖地で4月中旬から下旬、関東地域では4月下旬から5月上旬で、トウモロコシに代表される夏作物との組み合わせに適します。

タチワセの特徴は何といっても、従来のイタリアンライグラスのイメージを変えた、下垂せず直

立した上向きの葉を持ち、草姿全体が強い直立型であること、これに加え、強稈で耐倒伏性に優れている点です(表紙裏写真参照)。

従来の品種ですと、穂が出るころには少しの雨風でも根元から倒れてしまうため、刈りにくく、ロスも多く、また、いつも地際がむれた状態で、水気を含んでいるため、刈取り時の水分が高くなりやすく、乾きにくいものでした。その点、タチワセは多少の風雨でも倒れにくく、刈取り時の作業性が良いこと、また、天候が回復すれば根元まですぐ乾き、乾燥効率が高いことなど優れた利用性を持っています。

収量性も高く、春1番草の出穂期の収量は10 a 当たり生草で5~6 t、乾物で1 t程度が期待できます(表1)。

タチワセは強稈で、葉もサラサラと乾いた感触で、やや硬い感じがするためか嗜好性が悪いと感じられる方もいるようですが、飼料成分の分析結果では、やや繊維含量が多い傾向が見られるものの、他品種と比較して大きな差はなく、また、実際に当場の試験牛に給与した結果からも嗜好性や産乳性に問題はありません。

ただ、実際の利用場面では、タチワセが倒伏に

## 牧草と園芸・平成8年(1996)7月号

## 目次

第44巻第7号(通巻521号)



北海道宗谷丘陵での  
肉牛放牧

□雪印種苗育成・イタリアンライグラス優良品種	表②
□雪印育成・イタリアンライグラス早生品種の 特色と上手な利用法	近藤 聡… 1
■西南暖地における暖地型牧草地へのイタリアン ライグラスのオーバーシード事例について	西 俊彦… 5
■北海道における夏播き草地更新成功のポイント	片山 正孝… 9
□ウインターオーバーシーディング専用ライグラス 「フェアウェイ」の活用事例	植生事業推進課… 12
□作物を加害するセンチュウ類と薬剤によらない防除法 ②センチュウ対抗植物の効果と利用法	山田 英一… 17
□ホウレンソウ新品種「アーガス117」の 特性と栽培の要点	安達 英人… 26
□〈北海道向〉雪印の夏播き緑肥作物アラカルト	表③
□サイレージ調製用L型乳酸菌・スノーラクトールシリーズ	表④

表1 タチワセ、タチマサリの試験成績

(雪印種苗・研究農場、昭63)

品 種 名	出 穂 始		耐倒伏性(※)		草 丈(cm)		生草収量 (kg/10a)		乾物収量 (kg/10a)	
	千葉	宮崎	千葉	宮崎	千葉	宮崎	千 葉 (%)	宮 崎 (%)	千 葉 (%)	宮 崎 (%)
ワセユタカ	4/22	4/10	2.0	5.0	102	133	5,704(100)	5,779(100)	922(100)	1,095(100)
ワセアオバ	4/22	4/12	3.0	5.0	104	131	5,917(104)	5,346( 92)	941(102)	996( 91)
タチワセ	4/22	4/ 7	9.0	6.7	107	133	6,121(107)	5,529( 96)	955(104)	1,255(115)
タチマサリ	4/22	4/ 6	8.3	6.0	120	143	6,167(108)	5,712( 99)	923(100)	1,338(122)

注) ※…極強9～極弱1

強く、出穂しても倒れないため、つい刈り遅れとなるケースも見受けられ、これは嗜好性や栄養価の低下の原因になりますので、タチワセに限らず、出穂始めから出穂期の適期収穫をできるだけ守るようにしていただきたいと思ひます。

## 2 タチマサリの特性

タチマサリも出穂期、収穫適期はタチワセとほぼ同じですので、トウモロコシなど夏作物との組み合わせに適しています。早生品種としては草丈が高くなる大型で直立型の品種で、茎太のがっちりした稈を持ち、タチワセと同様に耐倒伏性に優れています。タチワセとの違いは葉の幅が広く、多葉で葉部割合が高いことで、葉の形状もタチワセのようなアップライトではなく、下に垂れるタイプです(表紙裏写真参照)。前述したタチワセの嗜好性が気になる方には、より触感が柔らかいタチマサリをお勧め致します。収量性ももちろんタチワセに優るとも劣らない多収品種です(表1)。

なお、両品種とも耐寒性は比較的強く、北関東

はもちろん東北南部でも利用されていますが、耐雪性はあまり強い方ではありませんので、根雪日数が60日を超えるような積雪地帯では、他の耐雪性の強い品種を利用して下さい。

## 3 早生品種の上手な利用法

### 1) 早生品種の利点

早生品種を利用する利点としては、次のことが挙げられます。

- ① 収穫適期となる出穂期が西南暖地で4月中下旬、関東で4月下旬～5月上旬であり、天候も安定する時期となるため、予乾や乾草調製作業が効率よくでき、比較的安定して品質の良い飼料が得られること。
- ② 収穫後にちょうど夏作物の中心となるトウモロコシの標準的な播種期となるため、高品質、多収体系として組み合わせやすいこと。
- ③ 早春から生育旺盛で、1番草収量では晩生品種に負けないほど収量性が高く、多収が得られること。

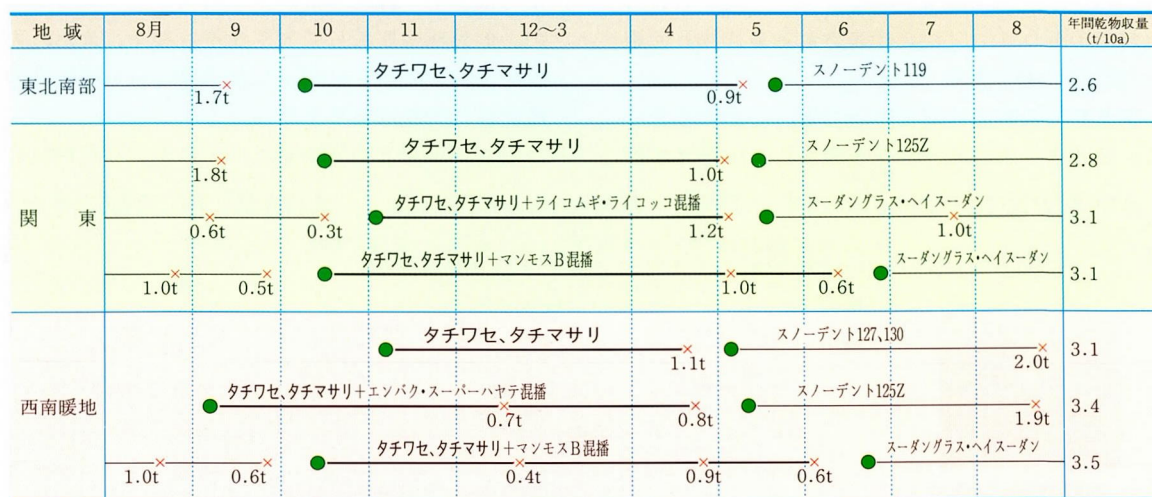


図1 タチワセ、タチマサリを利用した作付け体系例

● : 播種期 × : 収穫期

早生品種の共通した特性として、再生力は晩生品種に比べると劣りますので、長期利用の場合はマンモスBやエースのような中～晩生品種を利用し、早生品種は短期多収を目的に利用して下さい。

図1にタチワセ、タチマサリを利用した代表的な作付け体系例を示しましたので、これを参考に地域や利用目的に合わせて上手に利用していただきたいと思います。

## 2) 早生品種の栽培と利用法

### (1) 乾草・サイレージ利用に適する

タチワセ、タチマサリは晩生の4倍体品種に比べ、もともと水分含量が少ないことに加え、前述したように倒伏に強いいため、刈取り後に乾燥が早く、乾草およびサイレージ利用に最適です。

### (2) 混播利用で幅広く利用できる

#### ① 麦類との混播栽培

[夏播き麦類との混播で、省力連続多収栽培]

早播きトウモロコシの後作として、晩夏播きで、イタリアンライグラスと極早生エンバクまたはオオムギと混播利用します。年内はムギを主体に利用し、翌春にはイタリアンライグラスの再生草が利用でき、連続して省力的に多収かつ良質の自給飼料が生産できます。播種期は8月下旬から9月上旬、播種量は10a当たりタチワセまたはタチマサリ3kgに対し、極早生エンバク(スーパーハヤテまたはサビツヨシ)の場合は4kgを、オオムギ(ワセドリ)の場合は6～7kgを混播します。

[ライコムギとの混播で、倒伏軽減と冬枯れ防止]

タチワセ、タチマサリは耐倒伏性に優れる品種ですが、出穂期以降に強い風雨に遭うと倒れてしまう場合があります。そこで、耐倒伏性が抜群に強いライコムギ「ライコッコ」を混播することでライコッコが支柱の役目を果たし、倒伏を防止することができ、利用性が向上するとともに、乾物多収なライコッコによる増収効果も期待できます(写真1)。

また、ライコッコは低温発芽性に優れ、耐寒性が強いので、イタリアンライグラスの適期播種ができず、播き遅れてしまった時にはイタリアンライグラスを凍上害など冬枯れから守る保護作物としても役立ちます。

播種量は10a当たりタチワセまたはタチマサリ



写真1 タチワセとライコムギ「ライコッコ」の混播栽培

3kgに対して、ライコッコ4kgとし、関東で10月中旬～11月中旬、西南暖地で10月下旬～12月上旬に播種します。

ライコッコの出穂期はイタリアンライグラスの早生品種のそれとほぼ一致しますので、収穫は両者の出穂期に合わせて行なって下さい。

#### ② 早晩性の異なる品種との混播利用

[長期利用晩生品種との混播で利用性の改善]

トウモロコシとの組み合わせに適し、サイレージや乾草利用に適する早生品種の利用が増加してきた一方で、近年、省力的で作業性の良いロールベール、ラップ体系が広く普及し、イタリアンライグラスも、この体系の中でできるだけ長期間利用したいという要望も出ています。イタリアンライグラスを長期多回刈り利用する場合は、再生力に優れ、耐病性、耐暑性の強い晩生品種を利用す



写真2 タチワセとマンモスBの混播栽培

ることが有利になります。しかし、晩生品種はもとも水分含量が高いうえに、出穂期までおくと倒伏しやすく、乾燥が遅いという欠点があります。そこで、タチワセやタチマサリを混播することにより、収穫時期を早めるとともに全体の乾物率を上げ、予乾・乾燥時間を短縮し、さらに耐倒伏性の改善も期待できます。晩生品種は6月まで利用する場合は「マンモスB」(写真2)、7月あるいはそれ以降まで利用する場合は耐暑性の強い「エース」を選択して下さい。播種量は10 a当たり晩生品種を2 kg、早生品種を1～1.5 kgを混播し、春1番草の収穫は早生品種の出穂期を目安に行います。

### 〔刈取り適期幅の拡大のために〕

イタリアンライグラスに限らず、牧草の刈取り適期はTDN収量が最も高くなる出穂初期から出穂期とされ、この時期を過ぎると、どんどん消化率が低下し、乾物収量は増加しても栄養価の低い飼料となってしまいます。しかし、実際の現場では、天候や他の作業の都合で刈り遅れになってしまふケースが多いのが実態です。この改善策として、早晩生の異なる品種を混播し、刈取り適期の幅を広げる方法があります。例えば、早生のタチワセに中晩生のマンモスBを混播した場合、両者の出穂期の差は2週間前後あるので、仮にタチワセが開花期に達していても、マンモスBは出穂始めくらいのステージになります。イタリアンライグラスの開花期の乾物中TDNは60%程度ですが、出穂始めのTDNは70%以上あり、混合比率が半々である場合、混播のTDNは両者の中間値となり、単播で刈遅れた場合に比べ、飼料価値の急激な低下を回避できます(本誌・第44巻第4号参照)。もちろん、混播せずに単独でその品種の収穫適期である出穂期に刈るのがベストであることは言うまでもありませんが、気象的要因等に左右されやすい自給飼料の品質を安定化させるための手段として、検討していただきたいと思います。

早生と晩生品種の播種量の比率は50:50でもよいですが、春1回刈り利用で早生品種を主体に利用する場合は70:30くらいでよいでしょう。

### ③ マメ科牧草との混播栽培

タチワセは、その特異的な直立型の草姿と耐倒



写真3 タチワセとクリムソンクローバの混播栽培

伏性に強いという特性から、マメ科1年生牧草との混播適性にも優れています。タンパクやミネラルの補強、肥料の節減などの効果が期待できますが、多肥栽培による多収栽培の場面では、マメ科牧草はイタリアンライグラスとの競合で被圧されてしまうため適しません。

組み合わせるマメ科牧草は初期生育の早いクリムソンクローバが適し、深紅の花は景観的にもきれいです(写真3)。その他、ベッチ類や水田裏作ではレンゲも混播の相手として適しています。

ポイントは播種期をマメ科牧草に合わせ、播き遅れにならないようにすることと、施肥は特に窒素肥料を控えめとすることで、堆きゅう肥を多量に投入した畑や地力の高い畑では無施肥でよいでしょう。

播種量は10 a当たりタチワセを1.5～2.0 kg、マメ科牧草を1～2 kgを標準とし、地力の高い畑ではタチワセの播種量を控えめとして下さい。

ここ数年来、配合飼料や輸入粗飼料など購入飼料が安価に入手できたことや労働力不足などから、自給飼料の生産が年々低下傾向にありました。しかし、このところ円安および穀物相場の高騰により購入飼料の価格が上昇に転じたことから、再び自給飼料が見直される時期にきているのではないかと思います。畜産経営の安定のために自給飼料の生産と有効利用に、ここで紹介したイタリアンライグラスが少しでもお役に立てば幸いです。